

図書館実習を通して

藤井 真由（社会学部メディア社会学科）

大学1年生または2年生から司書課程を選択しこれまで学んできた方にとって、これから迎える図書館実習というのは集大成にあたると思います。このレポートでは私が司書課程をどのように捉え、図書館実習に臨んだのかを書いていきたいと考えています。これをきっかけに皆さんの不安などが少しでも解消し、図書館実習を行う上での参考になれば嬉しいです。

図書館実習を行うためには事前指導が2回あり、実習終了後にも事後指導が1回あります。そのほかにも提出物や、実習館との打ち合わせなど多くの時間を要します。最初の事前指導で「半端な気持ちなら時間の無駄になるので図書館実習はいかないほうがいいでしょう」という趣旨のお話を聞いたときには、私自身ドキッとしました。小さいころから身近にあった図書館の司書という仕事に興味があり、大学でその資格が取れるのならやってみたいという理由で始めた司書課程は、卒業単位に含まれないということで授業の履修が苦しいということもありました。司書課程の図書館司書コースの最終段階である図書館実習は、大学の顔として外部の方と関わる必要があり大きな責任も伴います。なんとかここまで続けてきたというだけでは今後の実習は苦しくなるだろうと思いました。

私はこの事前指導の段階で一度これまでの学びを振り返ることが大切だと考えます。なぜ司書課程をとったのか、何を学んできたのか、これから何を学んでみたいと思うのかなど自分自身の思いを整理してみてください。その上で図書館実習に臨むのかどうか判断をするのが一番でしょう。私の場合は、以前に新聞社へ実習に行った先輩のお話を聞いたときに、もともとメディアには興味があったことから実習に行きたいという気持ちが強まったことや、実際の仕事に近いレファレンス演習（現在の情報サービス演習）などの授業を受けた際に情報を整理し提供する面白さを感じたことを振り返りました。その上で、実際の仕事を体験させてもらうことで情報を扱う仕事への理解を深めたいと思い、実習への参加を決意しました。

実習先の候補としては馴染みのある公共図書館から、大学図書館や専門図書館まで様々あります。新聞社への実習を希望していた私は、これまで立教からの実習受け入れ経験のあった新聞社を選びました。もし今まで実習受け入れ経験のない場所へ行きたいと思えば、自ら交渉し実習させていただくこともできます。やはりここでも自分がどうして実習に臨むのか、何を学びたいのかという意味をしっかりと持つことが重要になってきます。2回目の事前指導でいざ実習先が決まると、実習先の方とどのような形で実習を行うのかという打ち合わせを自分で行うなど、立教の顔として大学の外で行動していかなければなりません。私は就職活動経験後のことであったためある程度のマナーなどの知識はありましたが、とても緊張をしました。しかしこのような期日を守ることや、失礼のない行動を心がけることは社会に出れば当たり前となります。そのようなことから、実習は司書の勉強の場だけではなく社会を学ぶ場としてもよい経験ができると思います。

実習期間は2週間程度です。私は10月2日から16日までの14日間で、土日休みをもらったので実質10日間の実習でした。また実習時間は、朝の10時からお昼1時間休憩を挟んでの18時まででした。新聞社の資料室での仕事だったので、本来は24時間体制の勤務でしたが、担当者の方が学生ということを考慮し働きやすい日程で組んでくださりました。このような実習体制も事前の打ち合わせで決める必要があります。実習内容は決められている

こともあるみたいですが、私が行かせてもらった新聞社ではプランは決まっておらず、どんなことを学んだのか、どういうことをやってみたいのかを聞かれました。実際には資料の返却処理など公共図書館と似たような作業を行ったほかに、データ保存のために新聞記事の切り抜きをするなど新聞社独特の作業も経験させていただきました。また、その新聞社は独自の分類を用いており、パソコンを使つての分類表の整理もさせていただきました。実習内容はこれまで学んできたことを活かす機会も多々あるため、しっかり復習をしていく必要があるでしょう。しかし、これまで知らなかったことや思いもよらなかった仕事をさせてもらえることも多くあります。特に専門図書館は仕事内容がそれぞれで大きく異なってきます。実習館選びの段階で、専門図書館を希望する人は先輩の報告書を読むなど事前の情報収集をしっかり行うことが大切です。

実習の2週間は、毎日新しいことを教えていただき、思っていた以上にあっという間に過ぎていきました。実習中には、実習先での司書という仕事に対する良い部分あるいは納得いかない部分など、様々な思いを抱くことになると思います。私の場合、新聞社の資料室の司書の方が産休でお休みされている状況でも、2週間の実習中は少なくとも、資料室の運営にあまり支障が出ていないように見えて、司書にしかできない仕事とは何なのかをとっても考えさせられました。ただ単に司書の仕事を体験しに行くのではなく、司書という仕事がどのように捉えられているのか、司書だからできる仕事とは何なのかなど、“司書”とは何かを見つめなおすことを含めたものが図書館実習なのではないかと思っています。

実習の終了後には、事後指導があります。その年度の実習参加者みんなで集まり、お互いの実習について報告をし、グループごとにテーマを決めディスカッションも行いました。私は、このディスカッションの時間がとても大切だと思いました。他の実習参加者も、司書に対して理想と現実のギャップを感じるものがあつたようで、どうすればより良い図書館にできるのか、司書についての学びに改善が必要なのではないかなど、多くの議論が飛び交いました。そのような様々な思いや考えを共有することで、実習で得た経験以上に司書への理解が深まっていったと思います。これから図書館実習に臨まれる皆さんには、実習期間が終わったからと気を抜かず、事後指導での学びも積極的に行ってほしいと思います。

図書館実習は、事前指導でお話が合ったように中途半端な気持ちで臨むと苦しい思いをすることになるでしょう。しかし、大学の外で経験することや感じることは、それまでの2・3年間教室で得たものの何倍もの学びをもたらしってくれると思います。主体的に行動することで、これまで以上に考えることが増えるはずです。私も最初は実習への参加に迷いもありましたが、今では事前事後指導含めて図書館実習に参加できよかったと感じています。是非多くの人に図書館実習に参加してもらい、様々な経験を通して司書課程の集大成としていただけたらと思います。